美しく豊かな自然の宝庫

知床

●写真と文 後藤昌美 写真家

ごとう・まさみ●1955（昭和30）年、北海道生まれ。1978年よりコマーシャル写真とともに大雪山を撮り始める。1984年、フリーの写真家になり、北海道の自然の撮影を開始。その後、サハリン・北方四島、カムチャツカ、狩場山地のブナ林などを取材。1999（平成11）年からは知床を中心に撮影を始める。主な著書・写真集に『イヨマンテ』『知床・残された神の土地』（小学館）、『サハリン・北方四島』（北海道新聞社）、『大雪残象』（京都書院）、『四季の彩』（淡交社）、『釧路湿原』（時事通信社）、『野生と火の国・カムチャツカ』（東方出版）、CD-ROM『知床　山と海の聖域』（シンフォレスト）、『水の大地・釧路湿原』（金羊社）などがあり、写真展も多数開催している。2005年8月には、写真集『IWOR 知床・生命の聖域』（山と渓谷社）が出版された。

夏の知床岬。周辺の岩場には白い波が打ち寄せ、原始のままの姿をとどめる森の中央には知床岳がそびえる。

知床を初めて訪れたのは、いまから25年ほど前、羅臼町でのオジロワシの撮影が目的だった。

当時私は印刷会社に勤め、コマーシャル用の写真を撮影していた。仕事のなかで大雪山の撮影があり、そのときに感じた山の素晴らしさに惹かれ、その後は会社の休みを利用して撮影のための山通いが始まり、これをきっかけに自然への関心がよりいっそう高まっていった。その後フリーとなり、大雪山とともに、徐々に知床へも足を運ぶようになった。

私が生まれ育ったのは、オホーツク海に面した北見枝幸という漁業の盛んな町で、冬には海一面が流氷に覆われ白い雪原となる。大雪山の撮影をしながら冬の知床に通っていたのも、どこかで生まれ育った懐かしいオホーツクの海、とくに流氷に惹きつけられていたのかもしれない。なかでも子供のころ、流氷に乗って竹竿を使い氷の間を行き来していたことが思い出される。いま思うと大変危険な遊びをしていたと思うが、当時の自然のなかでのさまざまな遊びの経験が、その後の知床の撮影には大いに役立っていったような気がする。

関心が大雪山から知床にうつって大きく変わったことは、大雪山では山の広大な風景が主だったが、知床では山はもちろんのこと森や湖、滝、断崖、海と流氷そして動物たちなど多種多様な被写体が目の前に広がり、撮影対象が非常に多くなったことである。豊かな自然環境をもつ知床半島は、北海道全体から見ると狭い地域ではあるが、北海道の自然すべてが凝縮されたような自然博物館的な地域である。

半島の中心をなす知床連峰は、日本百名山の羅臼岳を除くと夏の時期でもほとんど人に会うことがなく、知床の奥深さをよりいっそう実感させられる場所の一つである。山に限らず知床では、原始の姿をとどめている場所が多くあり、ヒグマの生息密度は世界でもトップクラスである。私の場合すべて単独行動なので、山や森などでの撮影はヒグマに対しての注意がとくに必要となってくる。私が知床の撮影を始めた二十数年前は、ヒグマに出会ったことは一度もなかった。ましてや川でサケを捕るヒグマの姿などは昔話のことのように思っていた。それが10年ほど前から、サケを捕るヒグマの姿が知床に戻ってきた。理由はヒグマの駆除をやめ数が増えたことなどもあるが、はっきりとしたことはわかっていない。5年ほど前になるが、夕方断崖で撮影をしていたとき、背後の森からヒグマが出てきて10mぐらいまで接近されたことがある。目の前は100mの断崖で身動きできず、このときはヒグマに対しての意識がまったくなかったので、

ヒグマの親子。

夏の西海岸。100mを超える断崖が続く。

さすがに驚かされた。また最近は一般の観光客が訪れる場所にも、ヒグマが平気で姿を現すようになり、人間との距離がどんどんなくなってきて、新たな問題となっている。

また知床を訪れた人ならわかると思うが、エゾシカの数の多さにも驚かされる。このエゾシカも20年ほど前はその数も少なく、とくに雄ジカの撮影には大変苦労させられた。当時は人の姿を見るとすぐ森の中に姿を消していたが、いまでは、2、3mまで近づいても逃げようとしないものもいる。エゾシカは人に直接危害を加えることはほとんどないが、冬の餌として樹木の皮を食べるので、それらの木がすべて枯れてしまい、枯れ木ばかりが目立つ森が年々多くなってきている。また以前は断崖に群落となって咲いていたスズランやエゾモメンヅルなどの花もエゾシカによって踏まれたり食べられたりして、いまでは跡形もなくなってしまった地域すらある。

エゾシカの群れ。

二十数年前から見続けてきた知床の自然は、人為的にはさほど大きな変化はないものの、数が増えた大型獣のヒグマやエゾシカに関しては、自然保護と逆行するかもしれないが、今後何らかの対策が必要な事態となってきている。

知床は2005(平成17)年7月に屋久島、白神山地に続いて日本で3番目の世界自然遺産に登録された。半島を形成する知床連峰から海岸線までは一部平坦な台地はあるものの、ほとんどが急峻な地形となっていて、これが幸いして開発から逃れ、日本のなかでも数少ない原生的な自然がいまなお残されている。

原生林の流れ。知床には大きな川はないが、澄んだ細い川がいくつも流れている。

シレトコスミレ。日本では知床にしか自生しない。

ナナカマド。可憐な赤がひときわ目立つ。

知床半島と国後島に挟まれた根室海峡の氷上から見た流氷。遠くに見えるのは知床連峰。

海岸線から山頂部までわずか1,600mの標高差ではあるが、ここでは植物の垂直分布が容易に見られる。海岸植物では北海道の花として有名なハマナスやエゾスカシユリ、その上部の針葉樹と広葉樹の混交林帯ではトドマツやミズナラ、さらにダケカンバ帯ではダケカンバやミヤマハンノキ、最も上部のハイマツ帯ではシレトコスミレやエゾツツジ、チングルマなどの高山植物のお花畑が山頂付近にまで広がり、狭い半島でも多種多様な植物が見られる。

知床にはこれらの森のなかを通っていくつもの川が海に流れ出ている。その川には一年を通して生息しているオショロコマや、夏から秋にかけて北太平洋を回遊してきたサケやカラフトマスが大量に遡上する。この豊かな森と川の恵みは、知床に住むさまざまな動物たちにとっては欠かせない食料となっている。とくに知床を代表するヒグマにとってはヤマブドウやナナカマドなどの木の実とともに重要な食料となっている。シマフクロウもまた、オショロコマなど知床ならではの魚を餌にし、深い森をねぐらとしている。またこれらの食べ残しや糞などは栄養分として再び森に戻っていく。

カラフトマスを捕まえるヒグマ。

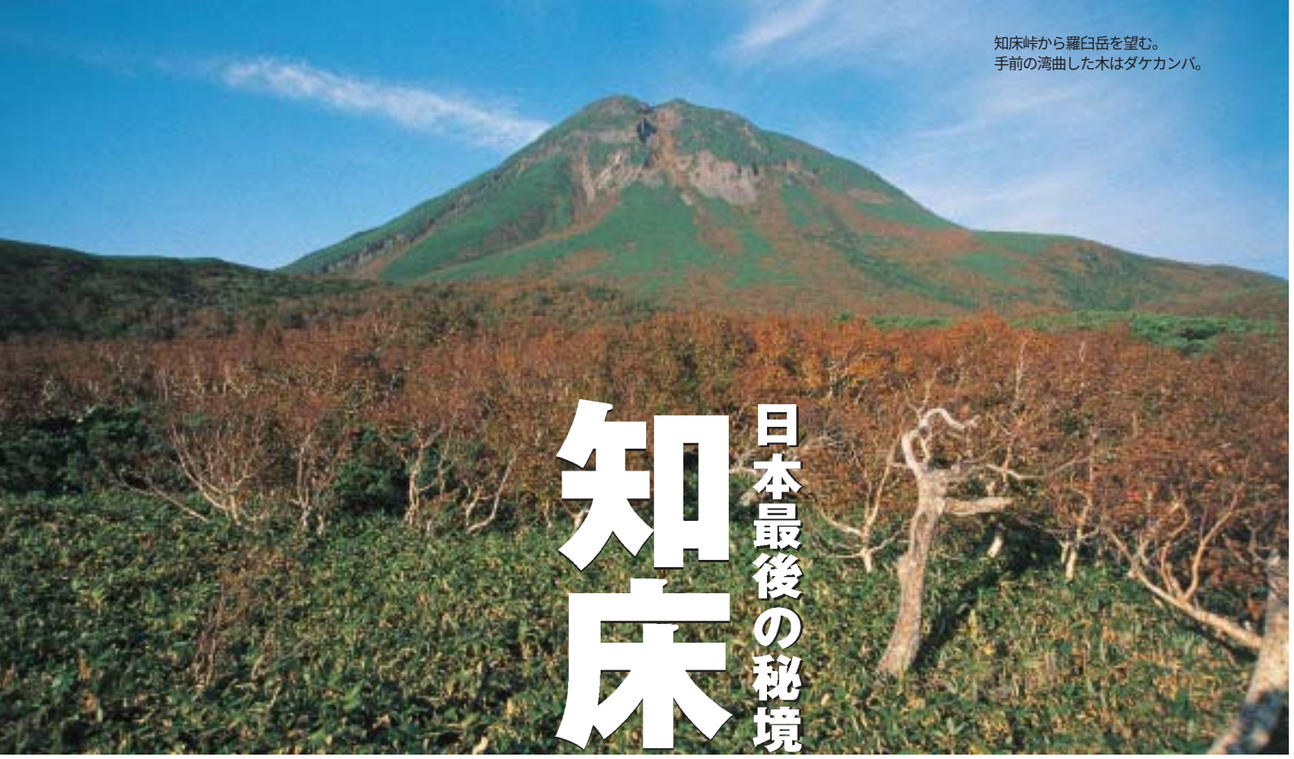
冬には、流氷とともに根室海峡の豊かな魚を求めて、オジロワシやオオワシが極東ロシアから越冬のために渡ってくる。このワシ類は世界的にも生息数が少ない貴重な鳥で、一度に数多く見られる知床は、世界でも類まれな地域でもある。ワシとともに魚を求めてくるのがアザラシと、絶滅危惧種に指定されているトドである。トドは、根室海峡においては、漁網被害など漁業との問題も生じている動物だが、最近は保護対策も行なわれるようになってきた。

魚を狙うオジロワシ。

ゴマフアザラシの子。流氷の上で育つ。

動物たちとともに知床を代表するのが流氷である。知床は流氷が見られる世界で最南の地域であり、この流氷が知床の豊かな自然環境をつくり出す元ともなっている。流氷の底に着いてきた「アイスアルジー」と呼ばれる植物プランクトンは、春になると大増殖する。この増殖により、これを餌とする動物プランクトンが増え、それらを食料とする魚介類、さらには大型の海獣類や陸上動物などが養われる。知床という豊かな自然環境のなかで、このような食物連鎖が続いているのである。

知床は、知床連峰や知床五湖、切り立った海岸断崖など景観の美しさとともに、動植物の多様性と食物連鎖が代表するように、海から陸まで互いに影響し合う生態系がいまなお残されている。世界自然遺産としてもっとも重要なのは、この豊かな自然環境を人類共通の財産として後世に引き継ぐことである。



知床峠から羅臼岳を望む。
手前の湾曲した木はダケカンバ。

日本最後の秘境

知床を行く

北海道の北東端、オホーツク海の南端に突き出るようにしてある知床半島。全長およそ70kmのその細長い半島は、山が連なり、平地がほとんどない。海岸線は険しい断崖が続き、風が強く吹きつけ、冬は流氷で閉ざされる――。知床の環境は、まさに人間を拒絶するように厳しい。しかし、だからこそここには豊かな自然が残され、生態系が守られてきたのである。

例年よりやや遅く木々が染まりはじめた昨年の10月初旬、その知床半島東岸の羅臼（らうす）から知床峠を抜けるルートで、西側にあるウトロへ向かった。

東には、根室海峡の向こうに国後島が見える。峠までの道中では、空気が澄み、遮る山もほとんどないため、その島影が常に視界に入る。

ウトロへは、網走方面から向かうルートもある。網走からウトロに行く途中には、知床半島最大の滝、落差50mの「オシンコシンの滝」がある。

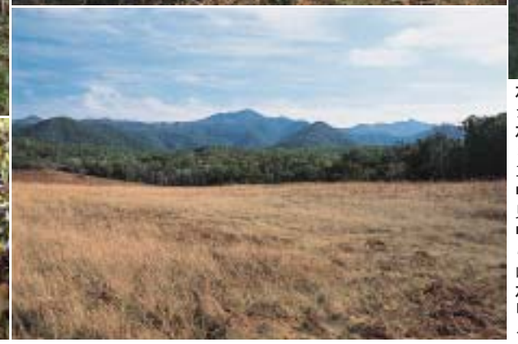
峠からは羅臼岳の眺めが素晴らしい。羅臼岳は標高1,661mの半島最高峰だ。付近には、ハイマツ帯のなかに白いダケカンバが広がっている。幹や枝が大きく湾曲しているのは、強い風が当たるからだ。この景色だけからも知床の自然の厳しさが伝わってくる。

＊　　＊

知床は野生動物の宝庫でもある。峠を下りかかると、道脇にキタキツネが歩いているのが見える。少し行くとエゾシカの姿もあった。脇目もふらず、ひたすら草を食べている。群れで移動しているようで、その後、数頭のエゾシカが道路を横切り、森に消えていった。

キタキツネ（上）やエゾシカ（下）など、知床ではさまざまな野生動物を見ることができる。ただし、餌を与えるのは禁物だ。

知床では、近年、エゾシカの数が増え、食料が足りなくなっているという。そのため、以前は主に細い木を餌としていたが、いまは太い木も食べる。最近では、皮がむきやすくても食べなかったイタヤカエデやエゾマツにもシカは手をつけ、枯れてしまう木が多い。枯れ木は、「フレペの滝」に至る遊歩道でも目立っていた。



左上●フレペの滝への遊歩道には、エゾシカによって皮を食べられた木が多い。
左下●遊歩道脇のヤマブドウの実は、ほとんどヒグマによって取られていたが、1本だけ残っていた木があった。
中上●フレペの滝の断崖をのぞく。右に見えるのはウトロ灯台。
中下●フレペの滝の手前に広がる草原から知床連山を望む。中央のいちばん高い山が羅臼岳。
左●フレペの滝。フレペとはアイヌ語で「赤い水」という意味。岩肌を水が流れるさまから「乙女の涙」とも呼ばれる。

＊　　＊

フレペの滝までの遊歩道は、ウトロの手前にある知床自然センター裏手から延びる。往復2kmの道を、NPO知床ナチュラリスト協会のネイチャーガイド・西原重雄さんに案内してもらった。

「入口付近は二次林です。皮のない木がシカに食べられたものです」と西原さんが話す。夏はササなどを食べるが、それらが雪で覆われる冬は、ハルニレ（エルム）やキハダなどの木の皮を餌にする。皮がつながっている木は生き延びる。しかし、切れると根から摂取した栄養が上まで届かない。その結果、枯れてしまうのだ。

林でも、メスのエゾシカの群れを見た。シカは同じ場所を歩く習性があり、その跡はシカ道と呼ばれる。一見すると単なる獣道だが、「実際に歩いてみると、餌がある場所へ行くのに非常に効率的なんです」と西原さんは言う。

林を抜けると、一気に視界がひらける。海からの風が吹きつけるため木が育たず、自然にできた草原である。背後には、草原を囲むように茂る原生林の向こうに、知床連山の稜線が美しく見える。

草原の先は、長い年月をかけて流氷がつくった、海を見下ろす200m近い断崖だ。切り立った崖をのぞき込むと、割れ目から湧き出た水が流れ落ちている。フレペの滝である。知床の大地の下を何年もかかってめぐった水が、ここで海に注ぎ出るのだ。「夏、崖ではオオセグロカモメやウミウが営巣します。冬になるとオジロワシがそのヒナを狙いにきます」と西原さん。

帰途、西原さんは「秋、葉が最初に染まるのはヤマブドウの木です」とその木を指しながら言う。ヤマブドウの実は、知床の動物たちの大切な食料だ。「実がないものが多いですね。ヒグマの通った道もあります。きっと彼らが食べたのでしょう」。

「フレペの滝」を案内してくれた西原重雄さん（左）。知床自然センター裏手にある遊歩道入口には、ヒグマへの注意を呼びかける看板もあった（右）。

ヒグマの気配――。知床は世界でもっともヒグマの生息密度の高い地でもある。そして、とくに多いのは、「知床五湖」周辺である。

＊　　＊

知床五湖は、周辺に川がなく、流れ込む水も流れ出る水もない不思議な5つの湖だ。その知床五湖の約3kmの遊歩道を、知床オプショナルツアーズのガイド・鈴木謙一さんと一緒にめぐった。

入口から普通に歩くと10分足らずで一湖に着くが、その途中にも、エゾシカによって皮がなくなった木が多くあった。知床の森でも3分の1の面積を占め、知床五湖にも多いトドマツのなかで、その枯れた姿はより目立つ。

一湖の湖岸に立つと足下にギンブナが集まってくる。「このギンブナは、オジロワシやシマフクロウの餌になります」と鈴木さんは言う。ギンブナは、明治時代以降、ここに入植した開拓者たちが放流したといわれている。彼らは、作物が育たないこの地を後にする1966（昭和41）年ごろまで、一湖の対岸に広がる平地で放牧もしていた。二湖までの道に太い木がほとんどないのは、

二湖から見た知床連山。一湖から二湖までの遊歩道は、団体観光客のルートとなっているが、二湖のはずれまでくると、その喧噪はもうない。聞こえるのは鳥の鳴き声や葉音だけだ。

倒木や岩に根を張り、生きている木が多い。

三湖付近で見たオスのエゾシカ。

ヒグマがミズバショウを掘り返した穴を指す鈴木謙一さん。

ヒグマが掘り返した跡。

皮だけを残し、中は空洞化しているミズナラ。

開拓者たちが家を建てるために伐採したからである。

二湖の途中からは太い木が多くなる。倒木に根を張り、その上で幹を伸ばしている木もある。知床の森の特徴でもある「倒木更新」だ。湖を右に、ミズナラやトドマツの森を左手に進んでいると、鳥が視界を横切った。鈴木さんが「ヒガラです。木の実をねらって飛んできたのでしょう」と教えてくれた。夏は水鳥も繁殖するという。

木の幹をエゾリスが駆け登っている。冬の間の食物を確保している最中だそうだ。クマゲラが木の中のアリを食べるために穴をあけたトドマツもある。

二湖から三湖へはすぐだ。その途中で、オスのエゾシカを見かけた。11月の繁殖期を前に、エネルギーをもてあましているのか、ササの葉に体を激しくこすりつけている。「エゾシカのオスは、尿をつけた泥を体中にこすりつけ、匂いでメスジカを誘います。また、大きく、4つに枝分かれして形がきれいな角のオスは、メスに人気があります。いい餌を大量に食べている証拠なのでしょう」と鈴木さんは言う。

三湖にはミズバショウの群落があるが、その根を好物とするヒグマも出没するという。ヒグマがミズバショウを掘り返した穴もあった。鈴木さんに聞くと3日前のものだそうだ。

このあたりは森が深く、ヒグマに遭遇してもおかしくない雰囲気だ。「ヒグマの登った跡があります」と鈴木さんが言う木には、爪痕が生々しく残っていた。「上にヤマブドウなどの蔓が巻きついていたかもしれません」。ヒグマは、枯れた木に生えるタモギタケをめざして登ることもあるという。

鈴木さんは、三湖の湖岸にある、皮だけで、中は空洞化しているミズナラがとても好きだと言う。「ムダなものを排除して、生きるために一生懸命な姿がここにあります」。

二湖から三湖に至る途中で見たエゾリス。動きが速く、私たちの足音を聞くと、一瞬にして消えた。

ヒグマの爪痕。縦に伸びる長い線は降りるとき、短い爪痕は登るときのもの。

岩でコロニーをつくる鳥たちの姿もよく見られる。

巨大な「象岩」。その姿が象に似ていることから名づけられた。

「カムイワッカの滝」。アイヌ語で「カムイ」は神、「ワッカ」は水を意味する。

入江で見たヒグマ。クルーザーの音に気づくとこちらを見た。

四湖は5つの湖のなかでもギンブナがもっとも多くいるため、オジロワシ、シマフクロウが飛来する。しかし、五湖は水が澄んでおり、ギンブナはいない。ミヤマカケスの鳴き声が聞こえる。「フィーヨー」という、笛のようなオスジカの鳴き声が耳に入る。

植物の色や姿、そして鳥や動物たちの声――。鈴木さんは、知床五湖を「知床の自然が凝縮されたところ」と言う。つまり、もっとも気軽に知床の自然に触れることのできる場所なのである。

＊　　＊

知床の豊かな自然が残されたのは、陸路がほとんどないということだけでなく、海からの人の上陸も拒んできたからでもある。

西海岸を、クルーザーに乗って洋上から見ると、100mを超える崖が続く。海鳥やツバメが、コロニー（集団繁殖地）を形成している岸もある。巨大な奇岩が多く、近くに寄るとその姿に圧倒される。また、「湯の華の滝（男の涙）」や「カムイワッカの滝」、「カシュニの滝」など、陸からはその全体像を目にすることのできない滝の流れが次々に現れる。

そんななか、入江の岩場で黒い影が動いた。ちょうどサケやカラフトマスが遡上する時期だ。魚影を追っているのだろうか、それがヒグマだとわかった瞬間、風景が一変した。野生が視界に入ると、人の意識も変わるのだ。

＊　　＊

人は太古から、動物のなかでクマをもっとも畏怖するとともに、もっとも親しみをもって接してきた。人はクマを狩り、クマも人を襲うことはあるが、数千年の間、お互いに共生関係を築いていた。実際、いまでもアイヌの人々はクマをていねいに葬るという。

沈む夕陽をウトロから眺める。夜は満天の星が見える。右手前はウトロ港。

現在は「秘境」という印象が強いが、実は、知床には、1万年ほど前から人が住んでいた。岬の先端の台地には、1000年以上前の竪穴式住居跡もある。明治期に入るまでは、数百年にわたってアイヌ民族による狩猟採集文化が続いていた。つまり、人と自然が共生していた場なのである。そしてこれからは、もっと強い共生関係が求められているのだ。

知床は、野生動物や美しく厳しい自然で人を圧倒するだけではない。古くからあった、そのような共生の必要性を喚起させる場所でもあるのだ。

■取材協力：
● NPO 知床ナチュラリスト協会／電話（01522）2-5522　http://www.shinra.or.jp/
● 知床オプショナルツアーズ／電話（01522）4-3467　http://www.shiretoko.info/

参考文献：中沢新一著『熊から王へ　カイエ・ソバージュII』（講談社選書メチエ）、佐古浩敏・谷口哲雄・山中正実・岡田秀明編著『世界遺産　知床の素顔』（朝日選書）、（財）知床財団著『知床自然観察ガイド』（山と渓谷社）ほか